

高等学校バレーボールへのリベロ制導入の有効性について

—静岡県内高等学校指導者への調査から—

河合 学*, 山田 吾朗**

A study on availability of the Libero System in high school volleyball

—Investigation in coaches of high school volleyball team in Shizuoka—

Manabu KAWAI* and Goro YAMADA**

Libero system was adopted in volleyball games on this year. The purpose of this study was to investigate an availability of the Libero System. The results of reply on coaches of 115 high school volleyball teams in Shizuoka prefecture are summarized as follows;

- (1) Above 70% coaches admitted to the availability of the Libero System on volleyball games.
- (2) Upper level teams was using Libero system effectively more than lower level teams.
- (3) Libero system was effective to use short players in both upper and lower level teams.
- (4) Libero system had a factor to entertain volleyball games, however on the other hand it had a problem to be placed at a disadvantage for lower level teams.

Key words: バレーボール, リベロ制, 有効性, アンケート

はじめに

バレーボールが考案されてから100有余年、その間に競技規則(以下ルールとする)はさまざまな改正が行われてきた。それはバレーボールが世界に通用するオリジナルなメジャースポーツとしての立場を確立すると同時に、刻々発達する技術や選手の能力にあわせて、より面白いスポーツとして変化を遂げた結果でもある。しかしその過程でプレーに大きく影響を与えるルール改正が行われた際には、その是非についてさまざまな論議がなされてきた。その例としては、1964年に実施されたブロックのオーバーネット許可や1976年のブロックのワンタッチをノーカウントとした改正³⁾などが知られ、試合内容にも大きな影響を与えたことが推察される。しかし改正当初は是非が問われた新ルールも時間がたつにしたがい当然のものとして受け入れられているのもまた事実である²⁾。

近年のルール改正は過去に例を見ないほど頻繁に行われ、その命題の一つとして「ラリーの継続」が取り上げられている。ラリーが有利になるような改正を実施することによりラリーを長続きさせることは、バレーボール本来の面白さを引き出し、プレーする者も観戦する者もエキサイティング溢れる試合になるはずである。その一例が1988年に実施された第1打球のダブル・コンタクト(ドリブル)の緩和であり、その後1995年の全身の使用可及び第1打

球のダブル・コンタクトの廃止、さらに1998年のフリーゾーンでの守備範囲規制の廃止などへと続いてきた。そして本年度から同様の意図を持つ新ルールの「リベロ制」が高等学校以上の6人制バレーボール競技に導入された。

リベロ制はチームのレシーブ力を向上させ、ラリーを長続きさせることを可能にすると同時に、今まで長身者中心のメンバー構成であったバレーボールにおいて低身長者にも活躍のチャンスが生まれることが大きな変革の1つと考えられる。しかし導入当初は以前に論議となったルール改正同様、その是非についてさまざまな意見が聞かれた。その多くは認知度の問題を含んでいたが、複雑化するバレーボールのルールが、気軽に楽しめることを目的に創案されたスポーツの立場と相反しているも確かである。

そこで、本研究では高等学校バレーボールにおけるリベロ制導入の有効性や有用性を把握し、今後のあり方を検討する資料を得るため、実際にリベロ制を活用する立場となった高等学校バレーボール部の指導者に対して、その実態及び意識調査を行った。

方 法

1. 指導者へのアンケート

- (1) 対 象 静岡県内全ての高等学校男女バレーボール部指導者を対象とした。
- (2) 日 時 平成10年8~9月
- (3) 方 法 リベロ制に対する指導者の意識や実際の活用する方法を知るために、質問紙法によるアン

*静岡大学教育学部

**静岡大学教育学部大学院

表1 調査対象人数とバレーボール指導歴

指導歴	男子チーム		女子チーム		合計
	地区大会	県大会	地区大会	県大会	
5年以内	17 (54.8)	5 (20.0)	13 (44.8)	5 (16.7)	40 (34.8)
10年以内	9 (29.0)	6 (24.0)	3 (10.3)	5 (16.7)	23 (20.0)
20年以内	4 (12.9)	9 (36.0)	10 (34.5)	10 (33.3)	33 (28.7)
それ以上	1 (3.2)	5 (20.0)	3 (10.3)	10 (33.3)	19 (16.5)
合計	31	25	29	30	115

単位は人数、()内は分類内における%を示す。以下、表7まで同様に示す。

ケートを独自に作成し、県内146校の高等学校に郵送配付した。79校から回答を得て、回収率は54.1%であった。ただし、回答した指導者数は男子56チーム、女子59チーム、総計115チームであった。各指導者の指導歴は表1に示す。

- (4) 整理方法 チーム総数115チームを性別及び成績別に区別した。チーム成績は過去一年間の大会結果を参考とし、県大会に出場していないチームを地区大会チーム(男子31チーム、女子29チーム)、県大会に出場しているチームを県大会チーム(男子25チーム、女子30チーム)とし、以上の4つの分類により比較検討した。頻度の算出は分類別のチーム数に対するものである。

2. 実試合におけるリベロ選手の貢献度調査

- (1) 対象 平成10年度静岡県高等学校バレーボール選手権の県大会に出場し、リベロ選手を有したチームのうち無作為に20試合(男子14、女子6)を抽出し観察の対象とした。
- (2) 日時 平成10年11月
- (3) 方法 コート上にリベロ選手が出場している間のチームの第1打球をカウントし、リベロ選手のレシーブにおける貢献度を算出した。レシーブの分類はサーブレシーブ・スパイクレシーブ・その他(ブロックカバーやチャンスボールなど)の3項目に分けてカウントした。

結 果

1. リベロ制に関する指導者へのアンケート

- (1) 導入以前のリベロ制に対する印象(表2)

リベロ制が導入される前年にFIVB主催大会で実地テストが行われ、テレビを通して我々はそれを知ることができたが、その当時はリベロ制に対する理解が薄く「内容がわからなかった(35.7%)」あるいは「関心がなかった(19.1%)」という指導者が多くみられた。しかし興味を示した指導者が29.6%みられ、新ルールに対していち早く反応

する積極的な姿勢もみられた。ことに県大会チームの指導者は男子40.0%、女子43.3%と、地区大会チームの男子22.6%、女子13.8%に比べてその割合が高く、レベルの高いチームの指導者ほど新しいルールに興味を示す度合いが高いことが明らかとなった。またリベロ制導入に対する反発は意外なほど少なかった。

- (2) 導入後のリベロ制に対する感想(表3)

実際に活用する機会を得た後のリベロ制に対する感想は「面白いルール(73.0%)」という回答が圧倒的に多く、男女・チームレベルに関わりなく支持する意見がみられた。しかし「たいした意味はない」という意見は男子チームに多くみられ、また「良くない」「関心がない」という意見はほとんど地区大会チームだけにみられた。

リベロ制の良い点・悪い点を記入させたところ、良い点としては1)多くの選手が起用できる2)低身長者でも活躍できる3)チームのレシーブ力が向上する4)ラリーが続く5)長身だがレシーブの苦手な選手を使えるなど、導入目的と合致する意見が多く述べられた。一方、悪い点としては1)選手数の少ないチームには不利2)リベロ選手がサーブを打てない3)ルールが複雑になる4)総合的な力が育成されにくいなど、弱小チームには益々不利に働くことや選手起用に関する教育的配慮に苦慮している姿が読み取れた。

- (3) リベロ制の活用状況(表4)

導入後約半年間を経た時点でリベロ制の活用状況を尋ねたところ、非常に活発に活用されており、県大会チームにおいては男子100%、女子96.7%と高い数値を示した。また地区大会チームにおいても多く活用されており、男子61.3%、女子62.1%と過半数を超えていた。地区大会チームにリベロを活用しないチームが男女ともに27~29%みられたが、これはリベロ制を否定しているのではなく、本来はリベロ選手を使いたくても「部員数の問題などで活用できなかった」とするチーム事情が読み取れた。言い換えれば、部員数が少なく有能な選手の集まらないチームにとってリベロ制は活用しにくいルールであるといえる。

- (4) リベロ制導入による試合内容の変化(表5)

リベロ制導入により試合が「面白くなった」とする回答が全体で53.9%あり、やはり県大会チームが地区大会チームよりも多い値を示す傾向がみられた。逆に「今までの方

表2 導入前のリベロ制に対する印象

導入前の印象	男子		女子		合計
	地区大会	県大会	地区大会	県大会	
面白いルール	7 (22.6)	10 (40.0)	4 (13.8)	13 (43.3)	34 (29.6)
ルールの改悪	1 (3.2)	1 (4.0)	0 (0.0)	2 (6.7)	4 (3.5)
内容がわからなかった	12 (38.7)	7 (28.0)	14 (48.3)	8 (26.7)	41 (35.7)
関心がなかった	9 (29.0)	1 (4.0)	6 (20.7)	6 (20.0)	22 (19.1)
その他	2 (6.5)	6 (24.0)	5 (17.2)	1 (3.3)	14 (12.1)

表3 導入後のリベロ制に対する感想

導入後の感想	男子		女子		合計
	地区大会	県大会	地区大会	県大会	
面白いルール	20 (64.5)	17 (68.0)	22 (75.9)	25 (83.3)	84 (73.0)
たいした意味はない	5 (16.1)	6 (24.0)	1 (3.4)	2 (6.7)	14 (12.2)
良くない	2 (6.5)	0 (0.0)	1 (3.4)	1 (3.3)	4 (3.5)
感心ない	4 (12.9)	0 (0.0)	3 (10.3)	0 (0.0)	7 (6.1)
その他	0 (0.0)	2 (8.0)	2 (6.9)	2 (6.7)	6 (5.2)

表4 リベロ制の活用状況

活用状況	男子		女子		合計
	地区大会	県大会	地区大会	県大会	
活用した	19 (61.3)	25 (100)	18 (62.1)	29 (96.7)	91 (79.1)
活用したかったができなかった	9 (29.0)	0 (0.0)	8 (27.6)	1 (3.3)	18 (15.7)
活用する気がなかった	2 (6.5)	0 (0.0)	3 (10.3)	0 (0.0)	5 (4.3)
その他	1 (3.2)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (0.9)

表5 リベロ制導入による試合内容の変化

試合内容の変化	男子		女子		合計
	地区大会	県大会	地区大会	県大会	
面白くなった	12 (38.7)	14 (56.0)	13 (44.8)	23 (76.7)	62 (53.9)
今までの方が良かった	6 (19.4)	1 (4.0)	1 (3.5)	1 (3.3)	9 (7.8)
以前と変わらない	10 (32.3)	6 (24.0)	13 (44.8)	6 (20.0)	35 (30.5)
その他	3 (9.6)	4 (16.0)	3 (6.9)	0 (0.0)	9 (7.8)

が良かった」とする意見は地区大会チーム男子に顕著にみられた (19.4%)。また「以前と変わらない」とする意見が全体で 30.5%みられ、リベロ選手を使ってみたもののレシーブ力は期待通りに向上しなかったとする指導者が多くみられた。

(5) リベロ制導入によるラリーの継続 (表6)

リベロ制導入によりチームのレシーブ力が向上し「ラリーが続くようになった」とする意見が全体で 58.2%みられ、ことに県大会チームに多くみられた。その内、女子においては県大会チームで 93.3%を示し、リベロ効果は試合に大きく貢献していることが明らかとなった。しかし「ど

ちらともいえない」とする意見が予想以上に多く、全体で 37.4%、地区大会チームに限ってみれば約半数の指導者がラリーの継続にはリベロ制が直接的に作用していないとしていた。これは (4) の試合内容に変化がなかったとした意見と同様に地区大会レベルのチームにおいてはリベロ選手の導入効果あまりないともいえるし、また活用したくても選手層が薄いためにリベロ選手を育成できないチームの実情を反映しているとも読み取れる。

(6) リベロ制導入によるチームの雰囲気の変化

リベロ制導入により、チームの雰囲気がどのように変化したかを記入させたところ、1) 低身長者のやる気が向上し

表6 リベロ制導入によるラリーの継続

ラリーの継続	男子		女子		合計
	地区大会	県大会	地区大会	県大会	
続くようになった	12 (38.7)	15 (60.0)	12 (41.4)	28 (93.3)	67 (58.2)
続かない	1 (3.2)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (0.9)
どちらともいえない	15 (48.4)	9 (36.0)	17 (58.6)	2 (6.7)	43 (37.4)
その他	3 (9.7)	1 (4.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (3.5)

表7 リベロ制の今後への存続

ルールとしての存続	男子		女子		合計
	地区大会	県大会	地区大会	県大会	
このまま存続すべき	9 (29.0)	7 (28.0)	13 (44.8)	12 (40.0)	41 (35.7)
細則を改善して継続すべき	3 (9.7)	5 (20.0)	1 (3.4)	10 (33.3)	19 (16.5)
廃止すべき	3 (9.7)	0 (0.0)	1 (3.4)	1 (3.3)	5 (4.3)
どちらでもよい	12 (38.7)	6 (24.0)	12 (41.4)	6 (20.0)	36 (31.3)
その他	0 (0.0)	3 (12.0)	1 (3.4)	0 (0.0)	4 (3.5)
無記入	4 (12.9)	4 (16.0)	1 (3.4)	1 (3.3)	10 (8.7)

表8 県大会におけるリベロ選手の活躍状況調査
(男子は14試合、女子は6試合)

男子	サーブレシーブ	スパイクレシーブ	その他	合計
リベロ選手	191 (34.7)	78 (32.5)	34 (19.9)	303 (31.5)
その他の選手	359 (65.3)	162 (67.5)	137 (80.1)	658 (68.5)
合計	550	240	171	961

女子	サーブレシーブ	スパイクレシーブ	その他	合計
リベロ選手	92 (34.7)	66 (36.1)	22 (27.2)	180 (34.0)
その他の選手	173 (65.3)	117 (63.9)	59 (72.8)	349 (66.0)
合計	265	183	81	529

単位は打数、()内は分類内における%を示す

た2)監督の意志をチームに伝えやすくなった3)ローテーションを意識するようになった4)全体の取り組みの姿勢が良くなり、活気が出てきた5)レシーブの信頼度が増した、などの回答を多く得た。

これらの中で地区大会チームでは「全体の取り組みの姿勢が良くなり、活気が出てきた」とする意見が最も多くみられ、リベロ制導入が単にレシーブ力の向上やラリーの継続に貢献しているだけでなく、チーム全体にも良い影響を与えていることを示した。また県大会チームでも「低身長者のやる気が向上した」が目立って多く、どのレベルのチームでも低身長者の意欲を向上させるのに役立っていることが明らかとなった。

(7) リベロ制の今後への存続 (表7)

リベロ制を今後も存続させることについての質問に対し、全体では「現在のまま存続すべき」が最も多く(35.7%)、

特に女子チームでは積極的な意見がみられた。しかし「細則を改善して継続すべき」が16.5%みられ、リベロ選手がサーブを打てないことなどへの不満が現れていた。一方「廃止すべき」とする意見は少数ながら(4.3%)みられた。さらに「どちらでもよい」という意見は予想以上に多く、リベロ制の恩恵を受けていないチームの多さを示していた。

2. 実試合におけるリベロ選手の活躍調査

男子14チーム、女子6チームの試合を観察し、リベロ選手が第1打球のレシーブにどの程度貢献しているか調査した結果を表8に示す。

男子においてはサーブレシーブの34.7%、スパイクレシーブの32.5%、その他のレシーブでは19.9%をリベロ選手がレシーブした。返球されてくるボールのほぼ1/3にリ

ベロ選手が関わったことになる。また女子においてはサーブレシーブの34.7%、スパイクレシーブの36.1%、その他のレシーブでは27.2%と、男子よりもわずかにレシーブ頻度が高かった。リベロ選手を含めたバックレシーバーは3人であるが、セッターを除いた5人がレシーバーと考えた場合、リベロ選手のサーブ及びスパイクレシーブに関する貢献度はかなり高いといえる。しかしチーム別にみた場合、リベロ選手のレシーブ率は25~50%と幅広く、その選手の能力あるいはフォーメーションによって活躍度合に差がみられた。

考 察

スポーツにおけるルールは不変なものではなく、常に改正を繰り返しながら進化を遂げている。それはどの種目にも当てはまり、新たなルール改正は試合をより面白くする要素を加えるものであったり、選手や技術の向上に合わせたものであったり、あるいは危険防止、道具の進歩に伴うものであったりする。

バレーボールにおいても誕生以来その時代の流れに合わせたルール改正が行われ、その過程において国際的な統一が実施され、選手の大型化や技術の向上に対応しながら現在の姿に至っている。そして近年行われている改正の主題となっているのが「ラリーの継続」と「試合時間の短縮」である。攻撃力が増した現代のバレーボールは、とすれば単発で単純な試合内容になりかねない。ラリーが続くことはよりエキサイティングな試合になることにつながると考えられるが、その方法としてはスパイクを制限するよりもレシーブ力を高める方が望ましい。その結果として第1打球のダブル・コンタクトの廃止などレシーバーにかなり有利な改正が行われてきた。一方、ラリーの継続とは相反する試合時間の短縮に関しても、ラリーポイント制の導入など新ルールを導入することにより、ある程度の効果をあげること成功している。

しかしこれら一連のルール改正に関しては賛成意見ばかりではなく、多くの関係者からバレーボールらしさがなくなるとか、教育的な配慮に欠けるなどの批判を受けているのも確かである²⁾。それは複雑化するルールが選手・指導者や審判員（指導者が兼ねることが多い）を悩ませたり、また学校教育の現場においては挨拶の省略や故意に足を使うプレーなど、生徒を指導する上での障害となっていることに現れている。そしてそれらの批判が十分に解消されないうちに本年度からラリーの継続を目的としたリベロ制が導入された。

高等学校のバレーボール大会にリベロ制が導入される以前のそれに対する指導者の受けた印象では、その役割が十分認知されていないこともあり、どちらかといえば歓迎されるルールではなかったように思われる。ところが導入後、実際にそれを試合で活用した結果としては7割以上の指導

者が有意義なルールだと認識していた。小柄ではあるがレシーブの上手なりベロ選手の参加によりチームのレシーブ力が向上したと感じる指導者が半数以上いることは確かであり、しかも観察試合の結果からもリベロ選手は実試合において確実にチームに貢献していることが明らかになっている。しかし導入前後のこの意識の変革はラリーがより長く続くようになったことよりも、長身ではあるがレシーブの上手くない選手や低身長者を有効に使うことができるという意味で指導者に受け入れられたのではないかと今回の調査から推察された。

大型化が必須条件の現在のバレーボールにおいて低身長者をいかに試合に活かすかは大きな課題の一つであった。特に高等学校の部活動において長身で有能な選手を複数有するチームはわずかであり、多くは身長の低い選手を多数有している。彼らをピンチレシーバーのように1セット1回のチャンスしか与えられないポジションではなく、準レギュラーとして活用することのできるリベロ制は、ただ単にチームのレシーブ力が向上するというだけでなく、バレーボールが好きで集まった子供たち全員に意欲と目標を持たせることができる結果となった。それは、以前なら身長の関係から諦めていたゲーム参加への道がより多くの選手に開けてきたといえる。スポーツ活動において学習過程に意欲を持たせることは、技術を習得させるだけでなくそのスポーツ活動を継続する動機づけとして最も意義深いものである³⁾。その意味で高等学校という限られた条件とはいえ、リベロ制の導入が果たした役割はかなり大きく、意義深いルール改正であったと考えることができる。

しかし一方で、リベロ制はさまざまな問題を含んでいることも確かである。まず第1に選手数の少ないチームにとっては絶対的に不利であることがあげられた。県大会チームがリベロ制を活発に採用して成果を上げているのに対し、地区大会チームの多くは部員数の減少に悩み部の存続すら危うい状況の中で、リベロに選手を回す余裕がないという実情が調査結果から読み取れる。その結果が、面白いルールであると思う反面、導入後の試合内容に変化がなく、しかも今後リベロ制を存続していくのはどちらでもよいという、一種の投げやりな回答に現れたと考えられる。第2にリベロ選手がサーブを打てないという点も多く上げられた。しかしこれについては本来の守備専門の選手起用という点で、ピンチ・サーバー（レシーバー）と一線を引くために区別があって構わないと考える。もしも教育的配慮からそれが必要であれば、高等学校という対象の中で独自のルール（細則）を付加することを考えるべきであろう。第3に長身選手の扱いにも戸惑いの声が上がった。レシーブの得意な選手が活躍できるリベロ制は、逆にみればレシーブの苦手な選手を排除することにつながる。それは6人制に必要な総合的能力を養う機会を将来性のある長身選手から奪ってしまうことにもなりかねない。長身選手の成長を考えた場合には、さらなる検討が必要と考えられる。

以上のような問題を含みながらもリベロ制は順調にバレーボールに浸透し、テレビを通して観戦している一般視聴者にも認知されつつある。長身者だけが優位となるバレーボールではなく、身長が低くても活躍でき、しかもラリーがより長く続きエキサイティングな試合展開が期待できるリベロ制は、総合的な意味で今後も継続し、大いに活用されるべき有意義なルールと考えられる。しかし国際試合やVリーグレベルとは異なる高校・大学あるいは今後導入の検討されるであろう中学校においては、勝つこと(チームの強化)以上に全ての選手の意欲や能力を引き出し、そしてより多くの生徒がバレーボールに親しむことのできるようなルールであることが期待される。そのためにはそれぞれのレベルや教育目的に応じて独自の細則を検討していくことも必要と考えられる。

ま と め

高等学校バレーボールにおけるリベロ制導入の有効性について静岡県内の高等学校指導者 115 名に質問紙法による調査を行った結果、次の結果を得た。

- (1) リベロ制を有意義なルールと認識している指導者は 70%を越え、レベルの高いチームほどその制度を有効に利用し、効果を上げていた。
- (2) リベロ制はラリーの継続に貢献すると同時に、その

導入は低身長者の意欲を引き出し、チーム全体の練習への取り組みを向上させる結果となった。

- (3) しかしレベルの低いチームにおいては部員不足等の理由でリベロ制を十分に活用できず、その恩恵を受けていない実態が明らかとなった。
- (4) リベロ制はバレーボールをより多くの人々に楽しんでもらったり、あるいはよりエキサイティングな試合を展開することを可能とする要素を持っているルールではあるが、採用する大会の実情に合わせた細則を設けるなど、今後存続していくためには改良すべき点もあることが示唆された。

参 考 文 献

- 1) 小笠原義文, 赤石忠男: 高校バレーボール部員の意識調査について。アルテス・リベラレス, 第 42 号, pp. 295-322, 1988
- 2) 河合学: バレーボール競技規則に関する一考察。静岡大学教養部研究報告, 第 30 巻, pp. 61-72, 1994
- 3) 木村正一: ブロックのルール改正に伴う内容の変化について(1977 改正)。体育学研究, No. 28, p. 490, 1978
- 4) 木村正一: バレーボールに於けるブロックのルール改正に伴う内容の変化について。慶応義塾大学体育研究所紀要, Vol. 19, pp. 11-23, 1979
- 5) 武隈晃: バレーボールの学習過程に関する動機論的研究(1)。鹿児島大学教育学部研究紀要(人文・社会科学編), pp. 131-143, 1985